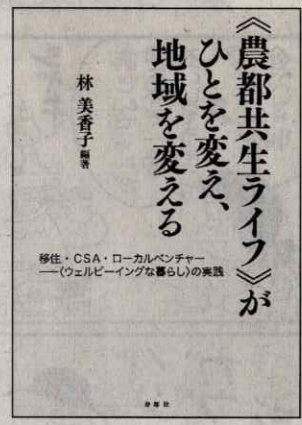
編著者に聞く

《農都共生ライフ》がひとを変え、地域を変える

林美香子・編著



見いだしたい「農との接点」

――研究テーマである「農都共生」とはどのような考え方ですか。

都会の人が農泊などを利用し、楽しみながら農業・農村の多面的機能を体験する。農家側もそうした機会を提供し、それがビジネスになり、生きがいにもなる。農村と都市で経済や人材などの循環が起こり、双方にとって活力となる効果をもたらしてくれると考えています。

――これまでも農都共生に関する本を書かれていますが、今回新たに執筆した理由は何ですか。

新型コロナをきっかけに、日本人の労働観が少しずつ変わってきていると感じたからです。都会で暮らす人たちの中には、移住を検討し「家庭の時間を大切にしたい」と考える層が増えている印象があります。そうした観点からも農都共生を考え、このタイミングでさまざまな人に、心の豊かさを重視する「ウェルビーイングな暮らし」を知るきっかけになってほしいと思いました。

――読者にどのようなことを伝えたいですか。

例えば、北海道に暮らしていると農業が比較的身近にありますね。農家・農村のことを知っているから「酪農家を応援しよう」「牛乳を多めに買って飲もう」という発想になります。一方で、首都圏など都市部に暮らす人々の中には、全く農業と関わりのない層もいます。農業の現場と全く関わった経験がなければ「とにかく食品は安ければいい」と節約ばかりにとらわれてしまうと思います。

「日本の農家を応援するような発想ができたらいいな」という思いも含めて、そのために農村地帯に行って、その良さを感じる大切さを伝えたいです。

――国内外のさまざまな事例を紹介していますね。

著書の中では、他分野から「家庭の時間を大切にしたい」と米農家に新規就農し、全国各地へ販売展開するようになった、北海道鷹栖町のすごい事例も紹介しています。しかし、いきなり農家を始める人はわずかです。農業・農村に関わるには、そうした農家の周りで応援する活動もあります。北海道内はもちろん、国内外のさまざまな移住、CSA(地域支援型農業)、ローカルベンチャーの事例を紹介しています。

私が伝えたいのは都会の人に「すぐに農村で暮らしましょう」ということではなく、農業・農村との「自分なりの接点」を見つけてほしいということです。同時に、地域の振興を模索する農家、自治体関係者の人たちにも問題解決のヒントにしてもらえればいいなと思います。

おぜ道書店

寿郎社・刊、2420円。副題は「移住・CSA・ローカルベンチャー――〈ウェルビーイングな暮らし〉の実践」。編著者は1976年、北海道大学農学部卒。85年からフリーのキャスター、農業ジャーナリストに。現在、北海道大学農学部客員教授、慶応義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究所顧問、「農都共生研究会」代表。